

初級編

「加賀ふるさと検定」受験生のためのテキスト

じんぶつ
人物編

あさい いちちゆう 浅井 一晁 天保 7 年(1836)～大正 5 年(1916)

陶芸家。藩士浅井長右衛門の二男。本名幸八。14 歳のときから宮本屋窯で九谷焼の絵付けを学び、明治 12 年、九谷陶器会社の画工長として活躍し、赤絵九谷の名工と称されています。竹内吟秋は実兄にあたります。

あすかい きよし 飛鳥井 清 天保 14 年(1843)～明治 17 年(1884)

勸業家。藩士一色武之丞の子。旧名一色一之助。維新後、上京し大蔵省職員を経て、米
国フラデルフィア万国博覧会を視察し九谷焼の振興を図りました。明治 12 年「九谷陶器
会社」を設立。また、同 8 年江沼郡西谷村片谷の黒鉛を利用し、柿沢理平を職工長とした
会社「加州松島社」を設立し鉛筆製造をはじめました。このほか、山中漆器や高岡銅器の
製造振興等を図り、維新後の郷土の産業発展に多大の貢献をしました。

あらいえ くまきち 新家 熊吉 (2 代) 明治 22 年 (1889) ～昭和 39 年 (1964)

旧加賀市の初代市長。父である初代熊吉が創業した新家自転車(株)の社長に就任し、鉄製
リムの生産を拡大させました。昭和 8 年、「国益チエン(株)」を設立し、チェーンの国産化に
とりかかりました。その後、事業は発展し、この会社が母体となり今日の世界的なチェー
ン製造メーカーである「大同工業株式会社」となりました。昭和 33 年の加賀市制発足に
おいて初代加賀市長に当選。現在、加賀市の名誉市民となっています。

あらいさ りよもん 新家理与門 享和元年 (1801) ～明治 5 年 (1872)

分校村の農民。みの虫一揆の首謀者。明治 4 年の大聖寺藩の廃藩に際し、無謀な税金
の取り立てに怒り、江沼郡内の農民たちおよそ千人が、藩の租税係や旧十村役の家を襲い
ました。一揆が平定されたあと、上分校村の裏谷重蔵や新家理与門など 8 名が逮捕され
ましたが、結局、理与門だけが明治 5 年に獄中で死亡しました。明治 28 年、江沼郡の
全町村長らが発起人となって、現在の分校町に理与門の碑が建てられました。

石川 嶂 天保 10 年(1839)～大正 3 年(1914)

勸業家。大聖寺藩士。明治元年琵琶湖に蒸気船を就航させることを藩当局に進言し承認を得ました。長崎で造船学を学び、蒸気機関 2 組を英人から購入し大津の一場啓二らとともに明治 2 年日本最初の湖上汽船一番丸を就航させました。この後、金沢・大聖寺両藩の出資により兵庫製鉄所(後の川崎造船所)を設立したり、大聖寺商法会議所の会頭になるなど大聖寺藩士では異色の人物として知られています。梅田五月は実兄にあたります。

磯村 年 明治 5 年(1972)～昭和 36 年(1961)

陸軍大将。大聖寺藩士であった父、平田繁の勤務先大津で生まれました。のち金沢の陸軍少佐、磯村惟亮の養子となり、陸軍士官学校を卒業。日清戦争や第一次世界大戦に出征し、その後、広島湾要塞司令官や野砲射撃学校長等を歴任し、昭和 8 年に大将となりました。NHK のニュースキャスターを勤めた磯村尚徳は年の孫にあたります。平田家の菩提寺は大聖寺山ノ下の蓮光寺です。

市橋 波江 文化 10 年(1813)～明治 2 年(1869)

贖金づくりの責任を一身にうけ切腹させられた大聖寺藩士。明治 2 年大聖寺藩は奥羽戦争の弾薬(パトロン)供出資金を捻出するため、金銀細工の技術をもっていた市橋をパトロン製造所に採用し贖金をつくらせました。その後、偽造が発覚し、藩は市橋一人に全責任を負わせ割腹させました。

稲坂 謙吉 嘉永 4 年(1851)～昭和 3 年(1928)

医師。越中(富山県)に生まれました。謙吉の父は黒川良安の弟。明治元年、加賀藩の卯辰山養生所に入學し、医学をオランダ人軍医ドクトル・スロイスやホルトマンから学び金沢病院に勤めました。明治 12 年、江沼郡にコレラが流行したことで江沼郡に出張。これが縁で、同 13 年金沢病院大聖寺分病院(現在の加賀市民病院)の院長となりました。

岩原 謙三 文久 3 年(1863)～昭和 11 年(1936)

実業家。NHK の初代会長。大聖寺穴虫出身。東京商船学校を経て三井物産会社に入社。ニューヨーク支店長や本店理事等を歴任しました。明治 43 年芝浦製作所取締役となり、大正 9 年 2 代社長に就任(昭和 5 年辞任)。この頃、全国的にラジオブームが起り、大正 13 年(社)東京放送局が発足し、総裁に後藤新平、理事長に岩原謙三が選ばれました。その後、大正 15 年に新たに「日本放送協会」が設立され、初代会長に岩原謙三が就任し、わが国の放送事業の基礎を築きました。墓所は下屋敷町の蓮光寺。

上杉 慎吉（うへすぎ しんきち） 明治 11 年(1878)～昭和 4 年(1929)

憲法学者。大聖寺^{けんぽう}耳聞山^{みみきやま}出身。金沢市の小学校を経て第四高等学校に入学。その後、東京帝国大学に入学。尊王論^{そんのうろん}、大権中心の憲法論を学びました。その後、東大の教授となり、天皇機関説^{てんかうきかんせつ}の美濃部達吉^{みのべ たつきち}と激しい論争を展開しました。上杉の学説は「大日本帝国は万世一系の天皇が統治すべき」というもので、国家主義を唱える学者の代表となりました。

梅田 五月（うめだ きつぎ） 天保 6 年(1835)～明治 45 年(1912)

政治家、教育者、実業家、大聖寺藩士。大野藩で砲術^{ほうじゆつ}や洋学を学び、帰藩後、藩学校の兵学教師を勤めました。その後、県会議員に当選。明治 22 年大聖寺町長、同 27 年衆議院議員を務めました。この間、九谷陶器会社の設立、製茶・製塩業の振興、石炭の製造、大聖寺・丸岡間の道路建設などに尽力し、郷土の殖産興業に貢献しました。大聖寺地区会館前には五月の胸像が建っています。

瓜生 外吉（うりう そときち） 安政 4 年(1857)～昭和 12 年(1937)

大聖寺出身の海軍大将。幼時東方芝山に学び、加賀藩致遠館に留学。七尾語学校で米国人教師オスボーンに英語・化学等を学びました。その後、アメリカのアナポリス海軍兵学校を卒業し、艦長や司令官として活躍しました。日露戦争開戦時では仁川沖海戦で露艦 2 隻を撃沈。大正元年、海軍大将となりました。妻は岩倉遣欧使節の女子留学生の一人永井繁子。墓所は全昌寺。

延 昌（えん しょう） 元慶 4 年(880)～康保元年(964)

平安時代の天台宗の僧侶。第 15 代の天台座主。加賀江沼郡出身。幼い頃に出家し、比叡山で仏教を学びました。天慶 9 年(946)年天台座主、天徳 2 年(958)には僧正の位につき、朱雀・村上両天皇の師となりました。

大家 七平（おおいえ しちべい）（4 代） 慶応元年(1865)～昭和 4 年(1929)

瀬越村の北前船主。同じ瀬越村の北前船主広海家の二男でしたが、大家家に養子となりました。積極的に和船を西洋型汽船に切り替え、ハワイやカムチャッカ、南洋諸島方面などへ旅客や貨物の運輸業をおこないました。小樽に支店を設け、大家倉庫を建てました。（建物は現在、小樽市の文化財指定）明治末期からは福島県や栃木県の鉱山開発にも出資しました。大正 10 年大家商事株式会社を設立し、事業を会社組織に改めました。

大幸 勇吉（おおさか ゆうきち） 慶応 2 年(1866)～昭和 25 年(1950)

物理化学者。大聖寺鷹匠町出身。東京帝国大学の化学科で桜井錠二の直弟子となりました。明治 36 年京都帝国大学教授となりました。昭和 7 年学士院会員。池田菊苗とともに日本の物理化学の基礎を築き、東の池田、西の大幸と並び称されました。墓所は松縁寺。

大澤 五洲 (十次郎) 嘉永 3 年(1850)～大正 2 年(1913)

製茶貿易商。渡辺宗三郎の三男で大沢家の養子となりました。少年期より製茶販売に従事。明治 4 年横浜で製茶貿易を営みました。同 9 年の米国フィラデルフィア万国博覧会に製茶出品と状況視察のため飛鳥井清・金沢商人円中孫平と渡米。同 13 年横浜に大沢商會を設立し、陶器・漆器等を海外に輸出することに尽力しました。

大下 雪香 明治 7 年(1874)～昭和 53 年(1960)

山中漆器の蒔絵師。山中温泉下谷町出身。明治 20 年、山中村の蒔絵伝習所に入所して修行しました。以後、金沢に出て蒔絵の先達から学び、明治 27 年、独立して蒔絵工房を開き、硯箱、棚、卓などの高級漆器に蒔絵を施し、数々の傑作を残し、山中漆器の代表的な作家となりました。

大田 錦城 明和 2 年(1765)～文政 8 年(1825)

江戸時代後期の儒学者。本名は元貞。大聖寺藩医の榎田玄覺の 7 男として大聖寺新町で生まれました。幼い頃より賢く「神童」と称されたと伝えられ、20 歳のとき、儒学を志して江戸に出て山本北山や多紀桂山などから学問を学びました。その後、三州吉田藩(愛知県豊橋市)や加賀藩などに請われて仕官しましたが、文政 8 年、61 歳で死亡しました。経学の自説をまとめた『九経談』は、当時、江戸においてベストセラーとなったと伝えられ、和文随筆『梧窓漫筆』や『海外諸国名録』などとともに錦城の代表的な著作となっています。

大塚 志良 江戸末期～明治期(生没年不詳)

江沼郡長。兄の長谷川順也は金沢市長。明治 10 年兄順也と協力して金沢の擦糸・製糸・銅器工場の建設に尽力しました。同 17 年から 7 年間江沼郡長を務めました。在職中、大聖寺機業伝習所を開設するなど大聖寺織物業の発展に尽力しました。

小栗孝三郎 明治元年(1868)～昭和 19 年(1944)

大聖寺出身の海軍大将。東京の開成中学から、明治 22 年海軍兵学校卒業、日清戦争で比叡分隊長として参戦。日露開戦に伴い、横須賀に第一潜水艦隊を編成、同隊司令となり、日本海軍潜水艦隊の生みの親となりました。その後、各艦長や司令長官を歴任。大正 10 年皇太子(昭和天皇)渡欧に際し、練習艦香取・鹿島両艦を率いて供奉しました。同 12 年海軍大将に昇任。墓所は実性院。

柿沢 理平 文政4年(1821)～明治26年(1893)

鉛筆製造会社「加州松島社」の職工長。明治10年士族授産施設としてつくられた松島社の職工となり、片谷村産出の黒鉛を利用しての鉛筆の試作品に成功しました。同16年オランダのアムステルダム万国博覧会で第1級第1等賞を獲得。大聖寺町の火災や社長飛鳥井清の死去等で工場が閉鎖するも負債義務を引き受けて職工長として工場を維持(明治36年倒産)しました。墓所は久法寺で、法名が「制鉛院造筆日肇居士」となっています。

桂田富士郎 慶応3年(1867)～昭和21年(1946)

病理学者。日本住血吸虫の発見者。大聖寺耳聞山町出身。県立金沢医学校を経て東京帝大の三浦守治教授に学びました。その後、医学博士となりました。明治37年に猫の解剖により日本住血吸虫を発見しました。大正7年日本住血吸虫の研究により帝国学士院賞を受けました。昭和20年神戸空襲により研究所・病院・自宅が焼失したため、大聖寺に帰り、耳聞山町の生家で診療所を開きました。母校錦城小学校に「桂田奨学資金」が設けられました。墓所は全昌寺。

鹿野小四郎(初代) 明暦元年(1655)～宝永7年(1710)

小塩辻村の十村。もともとは吉崎村の出身。若いころは船乗りをしていましたが、兄弟2人を海難事故で亡くしてから農業に専念するようになりました。吉崎村の肝煎役を務めたあと、小塩辻村に移住し、約15年間にわたって十村役を勤めました。農業の知識に深く、晩年、そのことを子孫に伝えるために『農事遺書』全5巻としてまとめました。

北ヶ市市太郎 安政6年(1859)～大正3年(1914)

明治時代の人力車の車夫。江沼郡庄村字加茂(現在の加賀市加茂町)出身。明治24年5月、ロシア皇太子ニコライ(のち皇帝ニコライ2世)一行が滋賀県大津付近を通過したとき、警備中の巡查、津田三蔵がサーベルで皇太子を切りつけるという、いわゆる「大津事件」がおこりました。このとき、一行の人力車の後押しをしていた車夫が北ヶ市市太郎でした。市太郎は、もう一人の車夫と共に、すばやく犯人津田三蔵をとりおさえ、皇太子は危うく難を逃れました。この事件のあと、市太郎ら2名の車夫はロシア政府から多額の褒賞金や年金を受けました。その後、市太郎は郷里に戻り、大聖寺馬場町に移り住みました。明治32年には江沼郡の郡会議員にもなるなど、町の英雄としてもてはやされました。しかしながら、その後、日露戦争がはじまると、国賊呼ばわりされ寂しい人生を送りました。

北出塔次郎 明治 31 年 (1898) ~ 昭和 43 年 (1968)

兵庫県生まれ。本名藤治郎。勅使村字栄谷の九谷焼窯元北出家の養子。大阪美術学校日本画科に入学、矢野橋村に師事。また色絵陶磁研究のため、北出家を長期間訪れていた富本憲吉の製作態度や考え方に影響を受けました。九谷の近代化に努力し、昭和 21 年 (1946) 工芸美術石川塾を開講し多くの子弟を養成しました。その後、金沢美術工芸大学の教授となりました。第 6 回日展で文部大臣賞を受賞。さらに昭和 43 年 (1968) 九谷焼作家ではじめて芸術院賞を受賞しました。

木村 素衛 明治 28 年 (1895) ~ 昭和 21 年 (1946)

哲学者。加賀市橋立町出身。京都帝国大学を卒業後、広島高等師範学校教授を経て、昭和 15 年に京都帝国大学の教授となりました。フィヒテを中心としたドイツ観念論を研究し、教育哲学の体系化を行ないました。その後、信濃教育会の招きで信州各地で数多くの講演や講義をおこない、そのため、上田、松本、豊科の 3 か所に木村の記念碑が建立されています。

草鹿 任一 明治 21 年 (1888) ~ 昭和 47 年 (1972)

大聖寺出身の海軍中将。金沢一中、四高、海軍兵学校を経て軍人となりました。昭和 16 年海軍兵学校長、同 17 年に第 11 航空艦隊司令長官となりました。ラバウルに司令部を置き、敗戦まで作戦を指揮しました。戦後、戦犯容疑で刑務所に収容されるが容疑が晴れ追放。晩年は戦没者遺族の処遇改善と厚生事業に奔走しました。

草鹿電之介 明治 25 年 (1892) ~ 昭和 46 年 (1971)

大聖寺出身の海軍中将、連合艦隊参謀長。大正 15 年海軍兵学校を経て海軍大学校を卒業。昭和 16 年第一航空艦隊参謀長としてハワイ空襲作戦を担当しました。同 19 年連合艦隊参謀長となって「あ号作戦」「レイテ作戦」を計画。同年海軍中将、第五航空艦隊司令長官に就任しました。草鹿任一は従弟にあたります。

久保彦兵衛 (6代) 天保 11 年 (1840) ~ 大正 4 年 (1915)

橋立村の北前船主。加賀北前船主のリーダー格として活躍。弘化 2 年 (1845) 大聖寺藩の財政整理の元締めを命じられ、進んで 1 万両を献上し、その功績により 130 石を与えられました。その後、たびたび赤字財政に苦しむ大聖寺藩に多額の献金をおこないました。彦兵衛の邸宅にはたびたび大聖寺藩主が訪れましたが、その藩主を迎えた御殿の間は、現在、金沢長町の「武家屋敷野村邸」の一部として移築公開されています。また、主屋の玄関から居間の部分は大聖寺下屋敷に移築復元され、「蘇梁館」として活用されています。

小泉 日慈 天保 12 年(1841)～大正 12 年(1923)

日蓮宗大学長・日蓮宗法主。大聖寺藩士小泉西遊の2男。若くして大聖寺神明町の宗寿寺に入り、嘉永元年並木日観について得度。のち、日蓮宗の海外布教に尽力しました。明治 35 年大僧正に昇進。同 39 年から 5 年間、日蓮宗大学学長（立正大学 2 代学長）となりました。同 42 年日蓮宗総本山久遠寺の 79 代法主。大正 2 年第 19 代日蓮宗管長に昇進しました。

河野安通志 明治 17 年（1884）～昭和 21 年（1946）

日本初のプロ野球チーム創設者。大聖寺藩士河野通理の子。明治 30 年一家で横浜に転居し、のち早稲田大学に入学。同大学野球部のエースとして活躍し、大学日本一に貢献しました。大正 11 年「日本運動協会」（芝浦協会）を仲間数人と創設。これが日本初のプロ野球チームとなりました。昭和 4 年早大野球部総監督となり、学生野球やプロ野球の発展につくしました。昭和 35 年その功績を称えて野球殿堂入りをしました。

小塚藤十郎 天明 5 年（1785）～ 安政 6 年（1859）

大聖寺藩士。諱は秀得。文政 7 年に藩に「植物方」の設置を進言し、自ら植物方奉行となりました。翌 8 年には「松奉行」となり、その後の人生を松の植林事業に捧げ、特に上木、瀬越、塩屋などの海岸線の砂地に数多くのクロマツを植え、現在の加賀海岸の松林の基礎を築きました。また、大聖寺藩領内の地誌である『加賀江沼志稿』の編纂にも力を注ぎ、天保 15 年（1844）に、32 巻の大著を完成させました。

後藤才次郎 江戸時代初期（生没年不詳）

大聖寺藩士。金沢出身。後藤家はもともと金沢に在り、加賀藩に仕えていましたが、大聖寺藩分立の際、初代藩主、前田利治が九谷の山奥に金鉱を求めて開発しようとしたとき、才次郎は山師を引き連れて大聖寺に移り住んだとされています。伝承では、万治 2 年（1659）、藩命で製陶法を習いに肥前有田（佐賀県）におもむき、長崎で出会った明（中国）から亡命した陶工を数名伴って帰藩し、古九谷窯を開いたといわれています。

斎藤 実盛 天永 2 年（1111）～寿永 2 年（1183）

平安時代末期の武将。越前出身。加賀市の永井町で生まれたという説もあります。その後、武蔵国長井に移り住み、当初は源義朝に仕えていましたが、平治の乱よりの後は関東の有力武将として平家に属し活躍しました。寿永 2 年(1183)、源（木曾）義仲追討のために北国に向かい、加賀の篠原付近で手塚太郎光盛に討たれました。この時、実盛は、老武者とあなどられることを恥とし、白髪を黒く染めて参戦していましたが、義仲の家来が討ち取った首を池で洗ってみると、黒髪はたちまち白髪に変わったといわれます。義仲は実盛の

首を見て涙なみだしたと伝えられています。それは、実盛は、かつて義仲の父が討たれた際に、幼い義仲を木曾に逃した恩人おんじんだったからです。

坂田 英一 明治30年(1897)～昭和44年(1969)

衆議院議員。農林大臣。江沼郡三木村出身。東京帝大卒。農商務省の局長などを歴任した後、昭和23年、食糧品配給公団の初代総裁そうさいとなりました。昭和24年に衆議院議員に当選して以来、7回の当選を果たしました。この間、第1次佐藤内閣で農林大臣をつとめました。

篠原 藤平 明治6年(1873)～昭和3年(1928)

大聖寺の機業家。絹織物の技法を改良した人。大聖寺仲町の絹問屋、篠原家の長男。羽二重・縮緬等の製織法を改良し大聖寺絹の発展を図りました。明治41年、合資会社篠原商店、のちの錦城物産株式会社を創業。大正7年、南郷村に日本絹織株式会社の誘致に成功。昭和4年、これらの業績により水守神社境内に紀功碑が建立されました。

清水 孝平 天保6年(1835)～明治30年(1907)

大聖寺の機業家。明治12年製絹改良会社を設置。また、法華坊の大聖寺機業伝習所の運営に協力し、羽二重を創出しました。明治22年豊田鍋吉等と長機物組合を起し、横浜に販路を開くなど、大聖寺絹の名声を高めました。

下口 宗美 明治37年(1904)～昭和59年(1984)

動橋村字中島(現加賀市中島町)出身の人形作家。当初は九谷赤絵の名工中村秋塘の門下生となって陶芸を学んでいましたが、のち、京都で人形作家の影響を受け、木彫人形を製作するようになりました。昭和21年に帰郷し、中島町の工房で制作に励み、日展や日本伝統工芸展などに連続入選を果たし、人形作家としての広く知られるようになりました。

須田 菁華(初代) 文久2年～昭和2年(1862～1927)

金沢の泉町に生まれる。本名与三郎。明治13年(1880)石川県勸業試験場の陶画部を卒業後、京都で製陶を学びました。明治16年(1883)竹内吟秋、浅井一毫らが去ったあとの九谷陶器会社に招聘され、山代に移りました。会社解散後、独立して陶画業を始め、明治39年(1906)には菁華窯(登窯)を築き、染付、祥瑞、呉須赤絵、古九谷等の倣古作品に腕をふるいました。大正4年(1915)から北大路魯山人との交友が始まりました。

竹内 吟秋 天保3年(1832)～大正2年(1913)

陶芸家。大聖寺藩士浅井家の長男でしたが、竹内家の養子となりました。飯田屋八郎右衛門や塚谷竹軒などから絵や焼き物の技術を学び、のち私学校「維新舎」を設立し陶画工を

養成しました。明治12年九谷陶器会社を設立し総支配人となりました。赤絵と古九谷風の色絵が巧みでした。墓所は松縁寺。

竹田 儀一 明治27年(1894)～昭和48年(1973)

大聖寺出身の厚生大臣。京都大学法学部を卒業。鈴木商店を経て弁護士から衆議院議員となりました。その後、実業界に転身し京都工作機械株式会社や大聖寺工作所（のち大聖寺航空工業株式会社）、大宮航空工業株式会社（現在の三櫻工業株式会社）などを創設しました。昭和22年日本民主党を結成し初代幹事長に、昭和23年芦田内閣のときの厚生大臣になりました。墓所は蓮光寺。

築城 良太郎 明治7年(1874)～昭和7年(1932)

山中漆器における干筋挽きや拭き漆仕上げなどの技法の創始者。山中漆器職人であった父親などから轆轤挽き技術を学びました。明治26年には挽き物木地に直接、生漆を塗布し磨き上げる「拭き漆」技法を開発し山中漆器の名声を高めました。

塚谷 竹軒 文政9年(1826)～明治26年(1893)

大聖寺藩士の家に生まれ。はじめ沢右衛門、のち浅と名乗りました。竹軒は号。万延元年(1860)大聖寺藩産物方の主席となり、陶業の振興に努めました。明治維新後、九谷本窯を譲り受け、大蔵寿楽、浅井一毫らとともに九谷陶業再建に尽力しました。その後、陶器商を経て、晩年は石川県師範学校などの教師を務めました。『苜蓿紀聞』の著者、塚谷沢右衛門は祖父にあたります。

辻 政信 明治35年(1902)～不詳

陸軍大佐、政治家。江沼郡東谷奥村字今立（現加賀市山中温泉今立町）出身。陸軍士官学校、陸軍大学校などを卒業後、第7連隊中隊長などを経て関東軍参謀となり、「作戦の神様」と呼ばれました。戦後、戦犯容疑を受けたため地下に潜伏。その体験を綴った『潜行三千里』は当時、ベストセラーとなりました。その後、衆議院議員4期、参議院議員1期を務めましたが、昭和36年(1961)参議院議員在任中に東南アジア視察のために出国し、ラオスで行方不明となりました。昭和43年(1968)7月20日に戸籍上の死亡となりました。

道官 咲子 明治35年(1902)～昭和21年(1946)

「安東の母」として知られる。江沼郡南郷村字上河崎（現加賀市上河崎町）に生まれ、福井県芦原町の道官家の養女となりました。21歳で京都市の佐々木家に嫁ぐも5年後、夫と死別。その後、満州に渡り安東市のホテルで女中頭として働きました。ホテルでは「お町さん」と呼ばれ在留邦人から親しまれました。終戦後、満蒙開拓団や一般邦人の難民が帰国する際、さまざまな支援をしその数は3千人に及んだといわれます。このことが中国

政府からはスパイ容疑をかけられることとなり、昭和 21 年 9 月、安東市の郊外の刑場で公開処刑されました。昭和 31 年に、お町さんの恩を受けた人々により、三木町の一角に顕彰碑が建立されました。

戸田 城聖 明治 33 年（1900）～ 昭和 33 年（1958）

宗教家。江沼郡塩屋村出身。城聖が 2 歳のとき、一家あげて北海道の厚田村に移住しました。大正 9 年に上京し、教育者、牧口常三郎に師事しました。昭和 3 年日蓮正宗に入信し、同 5 年に牧口と創価教育学会を設立し理事長となりました。昭和 18 年弾圧により投獄されましたが、非転向をつらぬき 20 年に出獄。翌年創価学会と改称して再建し、昭和 26 年に 2 代目の創価学会会長となりました。

中村 秋塘（初代） 慶応元年（1865）～昭和 3 年（1928）

陶芸家・赤絵細描。画工中村茂一郎の子。本名亀次郎。父から陶画を学び、明治 10 年、家業を継ぎました。のち竹内吟秋に師事し、陶技を修得。赤絵細描の名手となり「砥質手」をあみだしました。

中谷宇吉郎 明治 33 年（1900）～昭和 37 年（1962）

物理学者。江沼郡作見村字片山津小学砂走出身。錦城小学校、小松中学、第四高等学校を経て東京帝国大学理学部物理学科に入学。卒業後、理化学研究所で寺田寅彦の研究室員となりました。昭和 7 年北海道帝国大学教授。同 11 年世界ではじめて人工雪の製作に成功。また、雪のさまざまな結晶形ができる条件をあきらかにした中谷ダイヤグラムを発表。こうした功績が認められ同 16 年学士院賞を受賞しました。著作に『冬の華』『雪』などがあり、「雪は天から送られた手紙である」という宇吉郎の言葉はよく知られています。

中谷 治宇二郎 明治 35 年（1902）～ 昭和 11 年（1936）

昭和時代前期の考古学者。中谷宇吉郎の弟。母校の東京帝大で縄文時代の研究をおこなう。昭和 4 年パリに留学しましたが結核のため 7 年に帰国。大分県由布院で療養しながら『日本先史学序史』や『日本石器時代提要』などを発表しましたが、34 歳の若さで亡くなりました。

西出 朝風 明治 18 年（1885）～昭和 18 年（1943）

大聖寺出身の歌人。日本における口語短歌の創始者。父、孫一は橋立の北前船主西出家の一族。朝風は号であり本名は一（つかさ）。金沢一中から慶応義塾に学びましたが中退。文学に興味をもち、明治 34 年始めて口語短歌を作りました。大正 3 年「新短歌と新俳句」、同 11 年、雑誌「純正詩社」を創刊し口語短歌の普及に努めました。竹久夢二の影響を受け感傷的な作品が多くあります。

西出孫左衛門 (11代) 元治元年(1864)～昭和13年(1938)

加賀橋立村の北前船主。海運及び海産商を営む先代孫左衛門の3男で幼名を悌吉と称しました。長兄は分家し、次兄は病にて夭折したため、3男の悌吉が家業を継ぎ、孫左衛門を襲名しました。明治22年、函館を拠点とし、カムチャッカに漁場を開き、北洋漁業に転身しました。函館では、区会議員や商業会議所特別議員、函館銀行の取締役としても活躍し、北海道経済界の重鎮となりました。また、石川県江沼郡にあっては八十四銀行の取締役や大聖寺水電株式会社の社長として、ふるさと江沼郡の発展にも尽力しました。

裕伊之助 (三彩亭) 明治28年(1895)～昭和52年(1977)

画家。東京本所向島生まれ。パリ滞在中にアンリ・マチスに師事し水会創立に参加しました。終戦まもなくマチス展、ピカソ展、ブラック展の開催に尽力し、我が国洋画壇の復興や芸術文化の向上に大きく寄与しました。古九谷に魅せられ、昭和37年(1962)加賀市吸坂町に移住しアトリエを構え製陶活動を行いました。

東方 芝山 文化10年(1813)～明治12年(1879)

大聖寺藩士。儒学者。金沢藩儒学者の林孫坡や江戸の安積良斎などに学び、藩内一の学者として活躍しました。藩主の信頼が厚く、藩主の求めに応じて藩政改革の提言をしました。藩内の人材育成や産業振興にも力を注ぎました。著書に『勸農文』や『芝山草稿』などがあります。

廣海 二三郎 (5世) 安政元年(1854)～昭和4年(1929)

加賀瀬越村の北前船主。明治初年に和船のほとんどを洋帆船に切り換え利益をあげました。明治20年には初めての汽船北陸丸を購入し、これ以後、汽船に重点を移し事業を拡大しました。海運業のほかに筑前宮田炭坑、豊後久重山や薩摩大島の硫黄鉱山を経営。明治41年広海商事株式会社を、同29年日本海上保険株式会社を創立するなど日本を代表する北前船主となりました。

広田亥一郎 天保13年(1842)～明治12年(1879)

算学者。大聖寺藩士広田家の長男。幼時期から明敏を知られ、関流和算を学び免許皆伝となりました。その後、測量法を学び、海軍兵学寮測量及洋算教授となりました。明治8年出版した『洋算階梯』は洋算の教科書として知られます。加賀神明宮境内に記念碑があります。

広田 百豊 明治9年(1876)～昭和30年(1955)

日本画家。山中町荒地家の2男でしたが、3歳のとき大聖寺の伯父、広田亥一郎の養子となりました。石川県師範学校を出て、当初は江沼郡内で教師をしていましたが、明治44

年、教職を辞任し、京都の日本画家竹内栖鳳の内弟子となり画業に専念しました。その後、文展に連続入選し、大正七年「日本自由画壇」創設。昭和 11 年兼六園内にある金沢靈沢の御亭の天井に龍の絵を描きました。鳥類をよく描き、同 25 年その剥製標本 200 点を母校錦城小学校に寄贈しました。

深田 久弥 明治 36 年(1903)～昭和 46 年(1971)

山の文学者。大聖寺中町出身。大正 5 年福井県立福井中学校入学、大正 15 年東京帝国大学文学部に入学、在学中、改造社編集部^{かいぞうしゃ}に勤務しました。昭和 5 年文芸春秋^{ぶんげいしゅんしゅう}に「オロッコの娘^{むすめ}」を発表。同年大学を中退し作家活動に入りました。同 7 年「津軽の野づら」^{つがるの}「あすなろう」で作家として認められました。同 8 年小林秀雄らと「文学界」を創刊。昭和 22 年大聖寺仲町に疎開し、「はつしほ句会」や「錦城山岳会」を立ち上げました。同 40 年「日本百名山」で第 16 回読売文学賞受賞。同 43 年日本山岳会副会長に就任。同 46 年山梨県^{かやがだけ}の茅ヶ岳^{のういつつ}に登山中、脳溢血により急逝^{きゅうせい}しました。墓所は本光寺^{ほんこうじ}。江沼神社境内に深田久弥文学碑^{こんりゅう}が建立^{たて}されました。平成 14 年には、大聖寺番場町に旧山長織物会社^{きゅうやまちょうありもの}の事務所^{いしぐら}や石蔵を利用して「深田久弥山の文化館」がオープンしました。

前田 利治 元和 4 年(1618)～ 万治 3 年(1660)

初代大聖寺藩主。幼名宮松丸。加賀藩 3 代藩主前田利常^{としつね}の 3 男で、利治の母親は將軍徳川秀忠^{むすめ}の娘にあたる天徳院^{てんとくいん}(幼名珠姫^{たまひめ})。寛永 16 年、父から 7 万石を分与され大聖寺藩の前田家初代藩主となりました。利治は鉾山開発や陶工をまねいて九谷焼をおこすなど産業を奨励^{しょうれい}しました。菩提寺は大聖寺下屋敷^{ぼだいじ}の実性院^{じつしょういん}。

前田 利直 寛永 12 年(1672)～ 宝永 7 年(1710)

大聖寺藩 3 代藩主。 2 代藩主前田利明の 3 男。元禄 5 年に大聖寺藩 7 万石の 3 代藩主となりました。弟利昌に 1 万石を分与し 6 万石となりましたが、利昌^{としまさ}が事件を起こしたため、1 万石は返還され再び 7 万石となりました。宝永 6 年に、藩邸の一角、大聖寺川に面したところに「長流亭」を建造しましたが、將軍徳川綱吉の奥詰としてほとんど江戸に住んでいました。

前田 利譽 天保 12 年(1841)～ 大正 9 年(1920)

大聖寺藩第 14 代藩主。加賀藩主前田齊泰^{なりやす}の 7 男。安政 2 年兄利行の急死でその跡^{つぎ}を継ぎ、大聖寺藩の最後の藩主となりました。茶道や歌道にすぐれ、特に能楽は宝生流^{ほうしょうりゅう}の巨匠と評され、その後の大聖寺における能楽普及^{のうがく}に多大^{ほうしゅうりゅう}の貢献^{きょうけん}をしました。明治 17 年子爵^{ししやく}、同 30 年に貴族院議員^{きそくいん}となりました。号は「竹徑」。現在、江沼神社境内に建つ「竹徑館^{ちっけい}」はもと利譽^{くにもとへつてい}の国元別邸。

前田 利昌 貞享元年（1684）～ 宝永6年（1709）

大聖寺藩 2 代藩主前田利明の4男。通称は采女。元禄5年兄利直から新田1万石をあたえられ大聖寺新田藩主となる。上野寛永寺での先の將軍徳川綱吉の法会のおり接待役となりましたが、同役の大和柳本藩主織田秀親を刺殺し、宝永6年2月18日切腹を命じられました。享年26歳。

馬島 健吉 天保13年(1842)～明治43年(1910)

大聖寺の医師。初め金沢の黒川良安の門下生となり、安政6年大坂緒方洪庵の適塾に入門し蘭学を修めました。「適々齋塾姓名録」による入門は文久元年で593番目。慶応2年長崎で医学を学び、明治元年石川嶂の尽力で渡欧し、英仏独語を学びました。同4年藩命で帰国、金沢医学館の教授となりました。同15年、大聖寺に馬島病院を、同17年小松に小松病院を建設。石川県の医学界のリーダーとなりました。墓所は実性院。

三森 定男 明治40年(1907)～昭和52年(1977)

考古学者。大聖寺福田町出身。昭和4年京都帝国大学文学部史学科、同8年には立命館大学文学部(国漢)に入学。立命館大学を卒業後、考古学研究会を創立し主幹となりました。同20年の空襲で大聖寺に疎開、北陽新聞を発行。同24年立命館大学講師、同27年には札幌の北海学園大学教授となりました。著書に『加賀名跡誌』、論文は「日本先史文化に関する諸問題」等多数があります。

宮本 謙吾 明治24年(1891)～昭和53年(1978)

文筆家・郷土史家。熊本市出身。知人の紹介で大聖寺を訪れ、直後の関東大震災をきっかけに大聖寺に在住しました。以後機業家山田長太の知遇を得て「絹業週報」「聖城公論」等に筆を振りました。昭和11年『九谷焼研究』(学芸書院)を発刊。さらに『大聖寺藩史』や『江沼文献叢書』『大聖寺絹業史』などの郷土本を発刊しました。晩年は郷里、熊本市川尻町に帰りました。

宮永 盛雄 明治29年(1896)～昭和53年(1978)

片山津町出身の政治家。若い頃より江沼郡読書会を組織したり、新興仏教青年同盟と共に活動するなど、社会運動家として活動し、昭和12年には危険思想の持ち主として検挙され1年余り獄中生活を送りました。また、32歳の若さで作見村の村長を務め、その後も、初代片山津町長や石川県議会議員に、昭和28年には石川県議会の議長となるなど異色の政治家でした。

明 覺 天喜4年(1056)～嘉承元年(1106)

平安時代後期の僧、音韻学者。天台宗の延暦寺で学び、のち加賀山代温泉の温泉寺に隠棲

して「加州隠者」と称しました。悉曇学や梵字の発音などを研究し、我が国の50音字の配列に大きな影響を与えました。

本川 弘一 明治36年(1903)～昭和46年(1971)

生理学者。江沼郡桑原村(現加賀市桑原町)出身。夜間学校で学ぶなど苦学の末、東京帝国大学の医学部に入りました。その後、電気生理学を専攻し、昭和15年東北帝大教授となりました。脳波、色覚などの研究でノーベル賞候補にもなるなど、世界的に注目されました。同29年には学士院賞、朝日文化賞などを受賞し、40年には東北大学長を務めました。

森本 仁平 明治44年(1911)～平成16年(2004)

大聖寺出身の洋画家。東京美術学校師範科を卒業後、岩手県一関高等女学校に赴任し、同11年朝鮮に転任。同20年臨時召集を受け野戦部隊に所属。終戦後捕虜となり、シベリヤに連行されるも途中脱走し千キロを踏破。その後、引き揚げ船で一関市に帰りました。戦後は東京で小学校教師を勤めるかたわら自由美術協会に所属し多くの作品を発表しました。平成4年『森本仁平画集』を刊行。平成23年石川県立美術館で「生誕百年 森本仁平展」が開催されました。

藪内 竹翠 天保12年(1841)～大正6年(1917)

藪内流茶道10代家元。大聖寺福田家の出身。幼年期に京都に出て8代家元竹猗紹智に仕えました。大聖寺藩主利魯の茶頭も勤めました。明治7年、9代家元竹露紹智が死没した後、その遺児の後見役に迎えられました。のち8代の実子が早世したため、その未亡人の婿となり藪内流茶道の維持に努めました。休々斎紹智と称し、没後、その功績がたたえられ藪内流10代家元となりました。

山田 宗美 明治4年(1871)～大正5年(1916)

金工家。大聖寺鍛冶町の金工家九代山田宗光の四男。父から象眼、打ち出し技術を習い、兄3人が病死したため明治23年長三郎を襲名。同24年一枚の鉄板から全形を打ち出しする独自の鋳起法を創案しました。作品は鶏・猿・兎等の小動物が多くあります。以後大正4年まで内外の美術展で受賞30数回。特に明治33年パリ万国博覧会を初め、各展覧会に出品した作品は高い評価を受け、名実共にわが国工芸界の第一人者となりました。帝室技芸員に推薦が内定しましたが、発表直前に病死しました。「瓦上の鳩置物」「狛犬大置物」の2点が石川県指定文化財。

吉田屋伝右衛門（4代） 宝暦2年（1752）～ 文政10年（1827）

大聖寺の豪商。豊田が本名で吉田屋は屋号。酒造や薬商を営む傍ら、大聖寺藩の金融用達や町年寄りの役を務めました。号は石翁。72歳の高齢で廃業していた古九谷を再興することを決意し、文政6年ごろ、江沼郡九谷村に窯をひらきました。その後、文政9年には山代村に窯を移し、衰退していた古九谷の再興を果たしました。

渡邊卯三郎 天保2年（1831）～明治14年（1881）

医師。大聖寺越前町出身。儒学を東方芝山に、蘭学の基礎を金沢の蘭医黒川良安から学びました。嘉永元年大坂の緒方洪庵の適々斎塾に入門し、同6年第七代塾頭になりました。安政元年父の老衰により辞して帰藩しました。その後、藩主前田利徳の侍医となり、慶応2年再び長崎に留学しました。同3年帰郷後、藩校薫正館の洋学教授となりました。肺病のため51歳で死去。墓所は本光寺の後ろ、石堂山です。